

聖書：Ⅱサムエル 10：1～19

説教題：主が御目にかなうことを

日時：2018年6月10日（夕拝）

前の9章でダビデはヨナタンとの約束を果たすために、サウルの家で生き残っている人に神の恵みを施しました。この「恵み」という言葉はヘブル語のヘセドという言葉で、「真実」とも訳される言葉であることを前回申し上げました。ヨナタンは地上にすでにいませんでしたが、ダビデは彼との約束に真実であろうとして、その息子のメフィボシェテに、神が自分に示して下さった恵みを映し出すような恵みを施しました。その9章に続く今日の10章でダビデはナハシュの子ハヌンに「真実」を尽くそう、と言います。この「真実」という言葉もヘブル語ではヘセドという言葉です。すなわち9章でイスラエルの友に対して真実を尽くそうとしたダビデは、今日の10章で異邦人に対しても真実を尽くそうとしたということになります。ここに出て来るアンモン人のナハシュとはどういう人でしょうか。彼はⅠサムエル記11章に出て来たイスラエルの敵国の王でした。彼はイスラエルに攻め入り、一時は優勢でしたが、結果的にサウルに敗れた人です。その彼がいつダビデに真実を尽くしたのか聖書には書いてありませんが、おそらくダビデが逃亡生活をしていた時に助けてくれたのでしょう。サウルに追われているダビデを助ければ、何かと将来自分に有利になることがあるに違いないと判断したのかも知れません。いずれにしろダビデはその時のことを覚えていて恩返しをしなければならなかったと思います。そんな中、アンモン人の王ナハシュが死んだとの知らせを聞きました。そこでダビデはその子ハヌンに父の悔やみを言い、真実を尽くそうとします。ここにダビデの賞賛すべき姿が示されています。彼は同国民、同胞に対してばかりでなく、外部の人に対しても真実を尽くすことに心を用いた人だったのです。

ところがでした。ダビデが遣わした家来はひどい扱いを受けます。こちらが正しい動機で何かをしても、すべての人にそれが歓迎されるとは限らないということです。アンモン人の首長たちはダビデを疑い、3節でハヌンにこう言います。「ダビデがあなたのもとにお悔やみの使者を遣わしたからといって、彼が父君を敬っているとお考えですか。この町を調べ、探り、くつがえすために、ダビデはあなたのところに家来を遣わしたのではないのでしょうか。」そこで彼らはダビデの家来たちを捕らえ、ひげを半分剃り落

とし、衣を半分に切って尻のあたりまでにして送り返しました。ひげは当時においては名誉の象徴であり、男らしさ、また威厳の象徴だったでしょう。それをそり落とし、衣も半分に切って、尻が見え隠れする状態にした。こうして彼らはダビデの善意を悪く解釈し、宣戦布告に等しい応答をしたのです。

この結果、戦争が起こってしまいます。アンモン人は6節で周りの国々に応援を求めます。その結果、ベテ・レホブのアラムとツォバのアラムの歩兵二万が加わります。また、マアカの王の兵士一千、トブの兵士一万二千人も加わり、兵力は一気に増強されます。この結果、8~9節を見ると、イスラエル軍は前と後ろの両方から囲まれたようです。片側にはアンモン人、その反対側には今雇った強力なアラム人とトブとマアカの人々。今日の章最初で正しいことをしたダビデなのに、どうしてこんなことになるのでしょうか。なぜ主の御前でふさわしい行ないをしたのに、こんな危機的な状況に追い込まなければならないのでしょうか！

さてこんな状況で、ダビデに遣わされてリーダーシップを取ったのは軍団長ヨアブでした。彼は敵が自分の前と後ろにあるのを見て、まず強力なアラム人に立ち向かうため、イスラエルの精鋭の中から兵士を選び、自分が率います。そしてアンモン人との戦いのためには、残りの兵を兄弟アビシャイに託して備えさせます。もともと戦いに長けている武將らしく、迅速に決断します。しかしこの戦いの記事で目立っているのは、何と言ってもそのヨアブの口から出た言葉、特に12節の言葉ではないでしょうか。12節：「強くあれ。われわれの民のため、われわれの神の町々のために、奮い立とう。主が、御目にかなうことをされるのだ。」この彼の言葉から学べることをいくつか箇条書きのように申し上げたいと思います。一つ目にヨアブはここで主こそ主権者であると告白しています。自分たちが全力を尽くせば自分たちは勝てると彼は言っているわけではありません。あるいは相手は複数の国が協力して向かって来るので、あちらが有利だと言っているのでもない。あるいはうまく機転を利かせた方に勝利が転がり込むだろうと言っているのでもない。ヨアブはこの戦いのカギを握っているのは「主」であると告白しています。第二にヨアブはこの戦いの結果を指定していません。ある人は主が主権者であると告白しながら、自分たちが勝利すると述べていないこと、すなわち勝利しない可能性もあるかのような言い方をするのは不信仰ではないかと言います。主の主権を信じる者

は「主は勝利をくださる！」と言うべきではなかったかと。しかし、示されていないことなのに、私たちが勝手に考えて良いと思うことを述べて、神がそのようになさると指定することが信仰的なものではありません。三つ目に彼はここで「主が御目にかなうことをされる」と言っています。原文通りに訳せば、「主はご自身の目に良いことをされる。」私たちは自分の目に良いと思うことを神にしてもらいたいと考えて、それを神に押し付けやすいものです。そしてその通りにならないと失望・落胆し、力を落としてしまう。しかし主の目に良いことは私たちの目に良いことと違うかもしれません。四つ目は、そう述べつつもヨアブは主に信頼しているということです。主の目に良いことは、私たちの目に良いことと違うかもしれませんが、それでもそれは私たちの主が良いとされることです。私たちが真の幸いにつながるはず。そして五つ目にヨアブはこの主を見上げて、私たちは奮い立とう！と言っています。主が主権者であるから私たちは何も良くて良いとは彼は言いません。あるいは主の目に良いことは私たちが願うことと違うかもしれないと言って、手をこまねいてもいません。ヨアブは、主はご自身の目に良いことをされるということに信頼して、だから我々は全力でこの戦いに当たろう！と言っています。ここに素晴らしいバランスがあります。結果がどうなるかについては主にお委ねしつつ、自分たちとしては全力を尽くす。そして与えられる結果を主の目に良いこととして受け取り直す。

私たちの毎日の生活も、この先どうなるか分からないことがたくさんあります。クリスチャンは信仰を持っているからと言って将来のことが分かるわけではありません。たとえば高校や大学を受験してどうなるか、先に分かるわけではありません。就職についても願った会社に入れるのか、そこで一生働くのかどうか分かりません。結婚についても、それはあるのか、いつどんな人となのか分かりません。私たちはもちろんそこで自分の率直な願いを主に申し上げて良いのです。しかし先に私たちが結果を指定してしまうと、そうならなかった場合、大変な動揺が生じることになります。主は私の祈りに聞いてくださらなかった。主は私に働いて下さらなかった。そして主が主権者であることが信じられなくなくなり、非常な悩みの中に落ちてしまいます。そうならないためにも、私たちはヨアブのように、主は主の目に良いことをされる！と告白し、主の導きを待ち望むべきでしょう。たとえその結果が私の目に良いこととは違っているとしても、主が良いと思われることをわたしに与えてくださったと受け止めて従って行くことが大事だと思

います。

たとえば先ほどの高校や大学受験で考えれば、一生懸命祈って取り組んでも第一志望の学校への道が開かれなくてもいいかもしれません。しかし私たちがそこで持つべき確信は、主はご自身の目に良いことを導いてくださったということです。創世記 13 章にはアブラハムとロトの話が出て来ますが、ロトが良く潤ったヨルダンの低地を選び取った結果、アブラハムはその素晴らしい土地に住むことができませんでした。しかしその後を読むと分かりますように、その良く潤った地はあのソドムとゴモラの町でした。そこに行かなかったことは実は良いことだったのです。そのようにして実は守られているということがあるかもしれません。あるいはうまくは行かなかったその経験がその後どのように大きく用いられるか分かりません。病気もそうです。明日直るのか、1 週間かかるのか、一ヶ月入院しなければならなくなるか、さらには回復できるのか、回復できずに天に召されるのか。私たちに先のことは分かりません。しかしそこで私たちが持つべき信仰は主はご自身の目に良いことをされるということです。そしてそれは主に信頼する私たちにとって一番良いものであるということです。その導きは主にお委ねしつつ、私たちは自分のできることに精一杯、没頭・集中して行こう！こうしてヨアブたちは戦いに行きました。その結果、彼らの気迫は相手を圧倒したようです。強力な援軍アラム人は退散して行きます。それを見てアンモン人も慌てて自分たちの町へ逃げ込む有様となりました。

これで一見落ち着となったのでしょうか。15 節以降を見るともう一山あったことが分かります。アラム人は自分たちが圧倒されたことを恥じ、名誉挽回とばかりに強力に立て直して来ました。これまでは一部のアラム人が参加していただけでしたが、今度は川向こうのアラム、すなわちユーフラテス川の向こうのアラム人まで連れ出してやって来ます。この結果、一層の危機的状況が生じます。これを受けて今度はダビデ自身が出て行きます。そして勝利を勝ち取ります。ダビデはこうしてこの地方に広く支配権を持つようになりました。アブラハムに約束されたユーフラテスの向こうまで支配の力を持つようになります。周りの国々の王たちは攻めて来なくなり、むしろ和を講じてしもべとなり、ダビデは益々の平和と安定を享受することになったのです。

私たちもこのことから学んで自分に適用したいと思います。私たちも自分の将来がどうなるか前もっては分かりません。自分の願う通りになるかもしれませんが、願う通りにならないかもしれません。しかしその中で私たちが告白すべきは主が主権者であるということ。目に見える人間や、あるいは得体の知れない力が支配権を持っているのではない。その主はご自身の御目にかなうことを行われます。そしてそれはその方により頼む私たちにとって究極的な意味では一番良いことです。主がそのように導いてくださることに信頼して、私たちは自分のなすべきことに一生懸命取り組みたいと思います。どのような結果になるのか前もって心配し、悩み、恐れ、心を弱くするのではなく、主は御目にかなうことをなしてくださると信じて、私たちのなすべき働きに励み、私たちの思いを超えて、主が良いとお考えくださる最善に生かされる民の幸いに歩みたいと思います。